第33回日本証券アナリスト大会

証券アナリストジャーナル賞表彰

証券アナリストジャーナル編集委員会
編集委員長　川　北　英　隆 CMA

2017年度の証券アナリストジャーナル賞優秀論文審査の経緯ならびに結果につきましてご報告いたします。

今回審査の対象となったのは、2017年４月号から2018年３月号までに掲載された51編の論文・ノートです。これらの論稿につきまして、従来同様の審査基準、すなわち独創性、論理の展開力、実務への応用性に注目しながら、３段階にわたる審査を経て、受賞作の選考を行いました。

その結果、2017年11月号に掲載されました山田徹氏、臼井健人氏、後藤晋吾氏の「働きやすい会社のパフォーマンス」が選ばれました。

(受賞論文の選定理由は、本誌６月号及び協会ウェブサイト掲載の「論文審査の経緯ならびに結果について」をご覧ください。)

川北編集委員長

左から　川北委員長　臼井氏　山田氏　新芝会長　菱田副会長

受賞者の言葉

山田徹氏 CMA、臼井健人氏 CMA、後藤晋吾氏

この度は伝統ある証券アナリストジャーナル賞に選出いただき、誠にありがとうございます。本論文を執筆するに当たり、ジャーナル編集委員長やレフェリーの方々をはじめとする多くの方々からご助力を頂きました。この場を借りてお礼申し上げます。

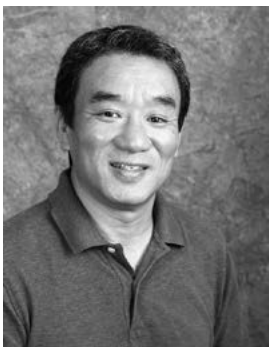
本論文は、日本経済新聞社が公表する「働きやすい会社」及び「人を活かす会社」ランキングを用いて、企業の働きやすさと財務・株式パフォーマンスとの関係を検証したものです。これまで企業のESG（環境・社会・ガバナンス）評価と財務・株式パフォーマンスとの関係について様々な議論がなされてきました。その中で、企業の従業員に対する姿勢に着目することで、そこに正の関係を見いだすことができた点をご評価いただけたと考えております。

それではなぜ、働きやすさが高いパフォーマンスをもたらすのでしょうか。これには様々な仮説が考えられますが、一つには企業の競争力の源泉が、工場や生産設備などの物理資産から、研究開発力やブランド力、情報システムなどの知的資産に移行しつつあることが考えられます。人材投資を含めて知的資産が生み出す企業の競争力は外部から見えにくいために、市場から過小評価され、将来の高いリターンにつながることが期待されます。時を同じくして、「働き方改革」をキーワードに日本における労働環境や生産性を見直す動きが急速に起きていることは偶然ではないかもしれません。このように「働きやすさ」は、資本市場の変化と労働市場の変化をつなぐ興味深いテーマであると思われます。

長い歴史を有するファイナンスの研究において、ESGは相対的に新しいテーマです。今後、これまで以上に議論が活発化し、理解が深まっていくことを期待します。われわれ自身もこの度の受賞を励みに、より一層、研究に取り組み、本当の意味で投資家と企業と従業員が共存できるより良い投資の在り方について考えていきたいと思います。

山田氏

臼井氏



後藤氏
（表彰式当日は、ご欠席）